

『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本』

高橋典史、塚田穂高、岡本亮輔 [編著]、勁草書房、2012年

おやさと研究所教授

金子 昭 Akira Kaneko

本書は、大学生のための宗教社会学のテキストとして編まれた書物である。編著者14名は、いずれも20代～30代の気鋭の若手宗教学者たちだ。現代日本社会の中で今、宗教が人々のどのような眼差しにさらされているか、宗教団体や宗教者たちの占める立ち位置は今どうなっているのか、さまざまな角度から分析と検討を加えている。若手研究者らしく斬新でアクチュアルなテーマ設定で、しかもどの章も内容がとても面白い。大学生や一般の教養層だけに読ませておくのはもったいない。何よりも、宗教関係者にこそ読んでもらいたい本である。

周知のように、現代の日本社会において、宗教のありようは大きく変貌しつつある。誤解をおそれずに言うならば、いま宗教がどのような形で生き残れるかが問われている時代だともいえる。

民俗に根差した宗教が日常生活の中で消えゆく一方で、文化遺産として保存され商品化される民俗宗教もある。その最たるものが巡礼であるが、新しいタイプとしてパワースポットへの巡礼などがある(第7章)。伝統仏教の独壇場だった葬祭儀礼の場もすっかり様変わりしてしまった。これはデータでも裏付けられる。自分の葬儀をするならば、「宗教色を抜いた形式にしてほしい」が44%で、「なんらかの宗教に基づいた形式にしてほしい」の41%を超えているという(第8章)。

新宗教の場合も、ひとりの勢いは失われつつある。それは、新宗教が日本の近代化への一種の「応答」なるがゆえに、「近代」そのものに変化や終焉がもたらされた場合、新宗教もまた変化をせまられているからである(第2章)。実際、幸福の科学(1986年設立)以降、数万人を超える教団は出現していない。カルト問題への嫌悪も大きい。どの教団がカルトなのかではなく、「宗教的脅迫」により精神を呪縛すれば、どの教団もカルト化するのである(第3章)。

教団宗教からは距離を取りつつ、それでも人々の宗教心は抛り所を求めてさまよい歩く。その一つの現われが、大衆文化としてのスピリチュアル・ブームであり(第5章)、死生に直面した臨床現場での汎宗教的・脱宗教的なスピリチュアル・ケアでもある(第9章)。いわゆる宗教の“出番”は、こうしてますます狭まりつつあるように見える。

しかし、“出番”は無くならない。いや、無くなることはありえない。それは昔も今も、人々は生きづらさをかかえて生きているからだ。生きづらさには、病気や人間関係の問題、貧困、差別など、さまざまなものが挙げられるが、とくに今日、喧伝されているのは「無縁社会」の問題である。貧困にあえぐ人々、自殺願望を持つ人々、精神疾患に苦しむ人々は、社会関係が不安定であることが少なくなく、生きづらさを他者と共有することができない。宗教の“出番”は、まさにここで、人と人との縁をどう結び、どう支えていくかにある。第4章「生きづらさと宗教」は、この問題を宗教の社会参画の課題として論じている。

ただ、ここにも日本社会に蔓延する宗教の否定的イメージが影を落としている。それは、人々が宗教に向かう回路を狭めただけでなく、信仰者が布教を自己規制する状況をすら生み出してしまったからだ。そのため、宗教はNPOなどの組織を経由したりして、社会貢献活動を行っている。こうした組織は、「宗

教団体・宗教者と結びつきのある組織 Faith-Related Organization」(FRO)と呼ばれ、「宗教活動への関与」と「公的機関との協働」の組み合わせから4通りに分類できる。

この「FROによる社会活動の4類型」は、宗教団体や宗教者が社会における自分たちの立ち位置を確認するために、きわめて利便性が高い分類法である。例えば、自分たちは、宗教活動を抑制しながら公的機関との連携を強めて活動しているが、活動が人々に受け入れられてきたので、この場面ではもう少し自らの宗教性を出せるのではないかと、またその分、自立した活動ができるのではないかと等々、社会参画のかじ取りを行ったりするときの模式図になるからである。とくに宗教関係者には、この章は熟読してもらいたいと思う。

本文構成と執筆担当者は次の通りである。

- 第1章 総論—日本社会における宗教の特徴(高橋典史)
- 第2章 新宗教の展開と現状(塚田穂高)
- 第3章 社会問題化する宗教—「カルト問題」の諸相(塚田穂高)
- コラム(1) 宗教法人とは何か(大澤広嗣)
- 第4章 生きづらさと宗教—宗教の新しい社会参加のかたち(白波瀬達也)
- 第5章 拡散・遍在化する宗教—大衆文化のなかの「スピリチュアリティ」(平野直子)
- 第6章 聖地巡礼とツーリズム(岡田亮輔)
- 第7章 日常/生活のなかの宗教—〈民俗〉を超えて(門田岳久)
- 第8章 変わりゆく葬儀・墓(碧海寿広)
- コラム(2) 沖縄の宗教(新里喜宣)
- 第9章 生命倫理学とスピリチュアルケア—死生の臨床と宗教(山本佳世子)
- 第10章 政治と宗教—現代日本の政教問題(藤本龍児・塚田穂高)
- 第11章 日本における宗教教育の歴史とその課題(高橋典史・山本佳世子)
- 第12章 グローバル化する日本の宗教—日本宗教の海外進出と外来宗教の到来(高橋典史・李賢京・星野壮・川崎のぞみ)
- 第13章 社会を読み解くツールとしての宗教社会学(岡本亮輔)
- コラム(3) 現代日本の「宗教と社会」についてさらに学ぶ/調べるには(塚田穂高・高橋典史)

